「諸行無常の歴史の中で何をみるのか」イザヤ書　21 章 1－17 節

2023.6.4　礼拝

序論）

今、私達はイザヤ書にある神様のみことばを見てきています。イザヤ書を日曜日のメッセージではじめて取り扱ったのは昨年の 10 月 23 日ですから、１１，１２，１，２，３，４，５と 7 ヶ月の間、私達はずっとイザヤ書を読んできたのです。

さて、みなさん。このイザヤ書を読んできて、「今日のメッセージは恵まれたな」と思ったことがどれぐらいあったでしょうか？　恐らくほとんどなかったのではないでしょうか。

正直なところ、イザヤが活動していた時代というのは、今の私達からすると、2700 年以上も昔のことであり、当時のアッシリヤ帝国が勢力を伸ばして言って、イスラエルの周辺諸国がそのアッシリヤによって滅ぼされていった。なんていう出来事は、今の自分には関係がない出来事であり、世界史の授業をもう一度受けているような、そんな退屈なメッセージがずっと続いている。　そうゆうふうに思っている方々も多いのではないでしょうか。

私も。最近は新しく教会に来られた方とか、久しぶりに教会に来られる方もいらっしゃるので、イザヤ書の難しい話よりは、みなさんに喜んでいただくためには、もっとわかりやすい別の箇所がいいのではないか。と思わなくもありません。

でも、旧約聖書の預言書からメッセージをしなければいけないというのは、以前から私の心の中に与えられていた迫りであって、私は、それは神様の導きだと理解しています。だから、神様は、きっとこのイザヤ書の預言を通して私に伝えたいこと、そして、みなさんに伝えたいメッセージがあるのだと思います。

ですから、わかりにくいなと思うかもしれませんけども、「神様が今の自分に必要なメッセージを伝えてくださるのだ」と期待して、一緒にイザヤ書のメッセージを受け取っていただきたいと思います。

今日のみことばの時代背景）

さて、本題に入りたいと思います。

今日のイザヤ書 21 章には 3 つの預言が書かれています。一つはバビロンに対する預言。2 つ目はエドムに対する預言。そして、3 つ目がアラビアの人たちに対する預言です。

今日の箇所も、当時の時代背景とバビロンの歴史を理解していないと、わかりにくい箇所なので、まずはそのことをお話したいと思います。

時は、先程もいいましたけども。アッシリヤ帝国がイスラエル及び周辺諸国を次々と占領していっている紀元前 720 年ごろです。当時、アッシリヤはどんどん色々な国を攻め滅ぼしていったのですが、攻められる側も黙って滅ぼされたわけではなくって、周辺諸国と連合軍を作って対抗しようとしたり、南にあるエジプトとかエチオピアとか、そのような力の強い国に頼ってアッシリヤに対抗しようとしていたりしました。　でも、アッシリヤの力は強く、どんどん色々な国を占領していったのです。

★バビロンに対する預言

　さて、今日の箇所の最初のことばは「**海の荒野についての宣告**」となっています。海の荒野とはどこのことかというと、これがバビロンのことです。バビロンにはユーフラテス川とかティグリス川といった大きな川がり、南にはペルシャ湾があるのですが、それでもバビロンには砂漠があったので、「海の荒野」と呼ばれていたようです。そして、そのバビロンはどのような歴史をたどっていったかというと、このような感じの歴史を辿っていました。

今日の預言が語られた頃のバビロンは、アッシリヤの支配下に置かれていましたが、

紀元前 721 メロダクパラダン２世が反乱・独立。
　　709 年　★アッシリヤのサルゴン２世に再び征服され、
　　689 年　★アッシリヤのセナケリブに破壊される。
　　625 年、新バビロニア（カルディア）帝国起こる。
　　609 年、アッシリヤを滅ぼす
　　597 年　エルサレムを占領。第一回捕囚
　　587 年　エルサレムを破壊。第二回捕囚
　　538 年　★ペルシャのクロス王に滅ぼされる

これがバビロンの歴史です。今日の箇所では、このような歴史を辿ったバビロンが、滅ぼされてしまうことが預言されています。では、実際にいつこの預言が成就したかというと、2 節にはこのように書かれています。

21:2 厳しい幻が私に示された。裏切る者は裏切り、荒らす者は荒らす。エラムよ、上れ。メディアよ、囲め。すべての嘆きを私は終わらせる。

エラムというのはペルシャの町の名前で、メディアはそのままメディアです。つまり、この預言はペルシャとメディアの連合軍がバビロンに攻め込んで、これを滅ぼしたという預言です。そうであるならば、恐らくこのイザヤ 21 章が預言しているバビロンの滅亡は、バビロンの歴史の最後、ペルシャによって滅ぼされた時のことを指していると思います。

そうすると、イザヤは紀元前 700 年ごろの人ですから、なんと彼は自分が生きている時代から 200 年後ぐらいのバビロンの滅びについて預言しているのです。
恐らくこれは神様がイザヤに幻を通して教えた預言だと思いますが、この幻を見させられたイザヤは、戦慄し酷く怯えました。3 節、4 節を読んでみましょう。

21:3 それゆえ、戦慄が私の腰に満ち、子を産む時のような苦しみが私をとらえる。私は心乱れて、聞くことができない。恐ろしさのあまり、見ることができない。
21:4 私の心は迷い、戦慄が私を襲った。私が恋い慕ったたそがれも、私をおびえさせるものとなった。

「私が恋い慕ったたそがれ」というのは、当時のイザヤがいた時代は、アッシリヤ帝国が、イスラエルをはじめ、周辺諸国を苦しめていたので、アッシリヤが滅びることを人々は切にねがっていたことです。しかし、歴史をみるとそのアッシリヤの滅びは、アッシリヤを滅ぼした、バビロンの壮絶な滅びに繋がっていくのです。イザヤはその歴史がおこる 200 年前に、神様にこの壮絶な歴史の流れを見させられたのです。だから、恐れ怯えるしかないような状態になりました。

みなさん、私達は基本的に今の時代だけを見ています。
今の時代だけをみて、今ある問題が解決することを願っています。
例えば、今の私達は、増税の問題や、少子化問題、高齢化問題、不景気、世界情勢の不安、頻発する自然災害の問題。そういった今ある課題だけに目を向けがちです。でも、神様の視点で歴史をみると、人の歴史は、いざ目の前の問題が解決したとしても、その問題解決は、次の困難に繋がっていくという現実を突き詰められます。イザヤにしてみると、アッシリヤさえいなくなってくれれば上手くいくと思う時代に彼は生きていましたが、アッシリヤがいなくなっても滅びの連鎖は終わらないことを神様からの預言で示されてしまったのです。神様がアッシリヤを通して諸国を裁かれたあと、アッシリヤがバビロンによって裁かれ、そのバビロンも滅んでいくという歴史を彼はみました。だから、イザヤは戦慄して怯えるしかなかったのです。

ところが、このバビロンが滅びる時、バビロンの人たちはどうしていたかというと。5節の前半

21:5a 彼らは食卓を整え、座席を並べて、食べたり飲んだりしている。

つまり、自分たちはアッシリヤさえ滅ぼした。力のある国なんだ！　とおごり高ぶって宴会をしていたのです。でも、神様が歴史を支配しておられてこのバビロンを裁くと決められたとき、ペルシャ・メディア連合軍がバビロンに攻めてきて、バビロンはあっけなく滅ぼされてしまうのです。5節の後半の

21:5b「立ち上がれ、首長たち。盾に油を塗れ。」という声は、おごり高ぶって宴会をしているバビロンの背後で、バビロンを攻撃私用と準備している者たちの声です。

そして、神様はイザヤにこのように言わせます。6節

21:6 主は私にこう言われた。「さあ、見張りを立たせ、見たことを告げさせよ。

神様がイザヤに見せる幻が続いています。そして、この幻を告げるように命じています。どんなことば幻が展開するかというと。7-9節

21:7 戦車や二列に並んだ騎兵、ろばに乗る者やらくだに乗る者を見たなら、よく注意を払わせよ。」
21:8 その人は、獅子のように叫んだ。「主よ。私は昼はいつも見張り場に立ち、夜ごとに自分の物見のやぐらについています。
21:9 見てください。今、戦車や兵士、二列に並んだ騎兵が来ます。彼らは互いに言っています。『倒れた。バビロンは倒れた。その国の神々の、すべての刻んだ像も地に打ち砕かれた』と。」

要は、これはバビロンを攻撃したペルシャの軍隊が勝利のパレードをして近づいてくる姿です。バビロンは、大宴会をしておごり高ぶっていたのに、
「倒れた。バビロンは倒れた」と言われ、そして「その国の神々も打ち砕かれた」と叫ばれるようになってしまうのです。これがおごり高ぶったバビロンの末路でした。

みなさん、これが神様の目からみた人の歴史なのです。
その時代、その時代に生きる人達は、目先の苦労を乗り越えることを求めていますけども、その目先の苦労や敵や困難とかが無くなったとしても、次の困難、次の滅びの歴史が続いていく。だから、バビロンにしてみたらアッシリヤという強敵を倒せて、景気がよくなって、宴会をして、おごり高ぶっていたけども、次の敵がきて倒されてしまうのです。

そして、この一連の歴史を見させせられたイザヤはいうのです。10節

21:10 踏みにじられた私の民、打ち場の私の子らよ。イスラエルの神、万軍の【主】から聞いたことを、私はあなたがたに告げたのだ。

イスラエルは、アッシリヤに踏みにじられ、やがてバビロン帝国にも踏みにじられており、いつも、眼の前の敵さえいなくなれば問題が解決できると思っています。でも、歴史の中で滅びの連鎖は続いていくのです。だから、例え眼の前の困難がなくなったとしても、高ぶって、宴会なんてしている場合じゃないのだ。　ということを神様はこの預言を通して、イスラエルに突きつけるのです。
なぜでしょうか？　それは、これらの歴史を支配されている【主】なる神様を、人々は見ようとしていなかったからです。

みなさん、バビロンが倒されたときのことばをもう一度みてください。9節の後半

21:9b 『倒れた。バビロンは倒れた。その国の神々の、すべての刻んだ像も地に打ち砕かれた』

実は、これと似たような言葉が新約聖書にある預言にかかれています。
新約聖書にある預言とはなにかというと、ヨハネの黙示録です。ヨハネの黙示録18章2節を読みます。

ヨハネの黙示録
18:2 彼は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。

これは歴史を支配されている神様が、この世の歴史の終わりに、大バビロンと呼ばれる。サタンの国、悪魔の国を打倒される。という預言です。
つまり、サタンに対する裁きの預言ということです。

歴史を支配される神様は、最終的には神様と私達の一番の敵であるサタンをさばいて倒されるのです。それが、神様がお決めになっている歴史なのです。
だからこそ、私達が一番注目しなければいけないのは誰かというと。
目の前の困難でも、あなたを苦しめる敵でも、サタンでもなくって、すべての歴史を支配される裁き主なる神様なのです。

私達はこの世で様々な苦しみ、困難に直面し、時には踏みにじられるような経験もします。でも、そんな私達が一番注目するべきなのは、目先の困難を乗り越えることではなくって、アッシリヤやバビロンといった大国さえも簡単に倒される。【主】なる神様なのです。10 節のイスラエルに語りかけることばは、私達にも語りかけておられることばなのです。

10 節のみことばの「イスラエル」の部分を「あなた」に置き換えて読んでみましょう。

21:10 踏みにじられた私の民、打ち場の私の子らよ。（あなた）の神、万軍の【主】から聞いたことを、私はあなたがたに告げたのだ。

みなさん、是非、世の中の出来事に一喜一憂するのではなく、この世界の歴史、これからおこる歴史さえ全てを支配されている神様に目をむけていきましょう。

★エドムに対する宣告
続くエドムに対する預言をみても同じことが言えます。11 節を読んでみましょう。

21:11 ドマについての宣告。セイルから私に叫ぶ者がある。「夜回りよ、今は夜の何時か。夜回りよ、今は夜の何時か。」

「ドマについての宣告」とありますけども、このドマというのがエドムのことです。そして、セイルというのはエドムの首都です。そのエドムの首都から預言者イザヤ

のところに導きをもとめて使者がきたようです。
この使者はイザヤのことを「夜回りよ」と呼びかけています。
「夜回り」というのは、夜パトロールする人のことです。
「アッシリヤが自分たちエドムの国を滅ぼそうとしているから、この暗闇の世界を見通している預言者イザヤよ。この暗闇の時代はいつまで続くのか？　」と、そうイザヤに質問を投げかけているのです。でも、イザヤはそっけない答えをいいます。12 節

21:12 夜回りは言った。「朝は来る。また夜も来る。尋ねたければ尋ねよ。もう一度、来るがよい。」

つまり、朝がくる。というのはアッシリヤが滅びる時が来るってことです。
でも、また夜がくる。つまり、アッシリヤの次は、バビロンが幅を利かせる時代がくるということです。そして、そのバビロンもまた滅びるときがきます。
先程、イザヤが神様に教えられたように滅びの連鎖というのは、歴史の中でつづいていきます。
だから、目先の困難さだけに目をとめて、いつ今の困難が終わるのか？と聞いてきても、また次の夜がくるよ。とイザヤは答えています。
そして、そのように夜が繰り返されるけども、その答えでよければまた聞きにきなさい。とイザヤはいうのです。
なぜイザヤはこのように答えているのでしょうか？　エドムというのは、もともとイスラエルの先祖であるヤコブのお兄さんのエサウが元になってできた国です。だから、本当は【主】なる神様を知っているはずの国。でも、その国は目先の困難さだけに目をむけて、神様に目をむけようとしていなかったのです。だから、「あなたが目の前にある困難だけに目を向けて、神様に目を向けないならば、夜があけて朝になっても、また夜がくるというこの流れがずっと続くのだよ」とそう遠回しにいっているわけです。

みなさん、この流れの中でエドムが、そして、私達がするべきことはなんでしょうか。【主】に目を向けて、【主】のみ心を行うことです。

★アラビアに対する預言
最後、アラビアに対する預言を見て終わりましょう。

アラビアというのは、アラビア半島の人たちのことです。ここででてくるデダンとか、テマというのもアラビアにある町の名前です。
ただ、デダンというのはアラビアでも北のほうにあってアッシリヤに攻められた地域であり、そして、テマというのは南の方にあってまだその被害を受けていない地域です。そしてテマは地下水が豊かにあって、町自体もかなり豊かな町でした。
そんなアラビアのデダンの人とテマに対しての預言が書かれています。
13-15 節を読みましょう。

21:13 アラビアについての宣告。デダン人の隊商よ、アラビアの林に宿れ。
21:14 テマの地の住民よ、渇いている者を迎えて水をやれ。逃れて来た者にパンを与えよ。
21:15 彼らは剣や抜き身の剣から、張られた弓や激しい戦いから逃れて来たのだから。

北のデダンの人たちはアッシリヤに攻められて、その戦場から逃げて南のテマにきたわけです。そして、神様はそのテマの人たちに、その逃げてきた人たちに水やパンを与えて受け入れてあげなさい。と言っています。
みなさん、このデダンとテマというのは距離でいえば 150km ぐらいしか離れていません。だから、デダンが攻められたということは、テマもすぐ危なくなる可能性があるのです。でも、神様はテマの人たちにその逃げてきた人たちを受け入れて、水とパンを与えなさいといわれています。なぜでしょうか。
それは、自分たちに危険があったとしても、今、目の前の人たちを助けるちからがるのならば、その人たちを受け入れて助ける。というのは神様のみ心だからです。

わかりますか？　危険の可能性や。滅びる可能性だけをみていたら、逃げてきた人たちを助けることなんてできません。なぜなら、人の歴史は、滅びて、栄えて、滅びて、栄えてという歴史は繰り返すからです。危険のない時に助けるような心づもりでいたら、いつまでも助けることができないのです。
神様は、今、助ける力があるのならば、どうゆう状況でも助けてあげることを求められるお方です。
アラビアも結局は滅びる定めにありました。だから、16 節には

21:16 まことに、主は私にこう言われる。「雇い人の年季のように、もう一年でケダルのすべての栄光は尽きる。

とあります。ケダルもアラビアの町のひとつです。つまり、アラビアが滅びることをいっているのです。でも、17 節をみるとこのように書かれています。

21:17 ケダル人の勇士たちで、残る射手は数少なくなる。」まことに、イスラエルの神、【主】が告げられる。

これはどうゆうことでしょうか？　ケダル人が全員滅びていなくなるのでなく、少し残ることをしめしています。
そして、イザヤ書においてこの「残る」ということばは、神様の憐れみがあるというしるしです。

滅びの歴史は続いていく。でも、その中に必ず朝があるし、神様の憐れみがある。
だから、私達は【主】なる神様に希望をおいて、このお方にしたがっていくのです。
例え、これから危険があるといった状況であったとしても、人を助ける力があるのならば助けていきましょう。
それがこの歴史の中で、【主】に従って【主】にある希望を持ち続けて、残る者の生き方なのです。